

支店長の わがまち紹介 第63回



石岡のおまつり

石岡市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接なつながりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県石岡市です。石岡支店長が石岡市長 今泉文彦氏にお話を伺いました。

石岡市は「筑波経済月報」第16号（2014年11月）第16回本コーナーにて紹介させていただきました。改めまして、本市の魅力や特徴、展望についてお聞かせください。

■市の玄関口から賑わいを創出

本市の玄関口であるJR常磐線石岡駅周辺は、駅の東側と西側で全く異なる顔を持っています。商業施設が立地する東側の新市街地は、人口が増加しているのに対し、歴史上価値の高い看板建築など、市の登録文化財が数多く残る西側の既成市街地は、空洞化が進み、空き家も目立つようになりました。



JR石岡駅西口広場



石岡市長
今泉 文彦氏



石岡支店長
生田目 均

このようなことから、本市では東西の人の流れを活発にするため、現在、駅周辺の整備を進めています。その1つとして、平成28年、石岡駅に東西自由通路を新設し、橋上駅舎としてリニューアルしました。エスカレーターやエレベーター、多機能トイレなどのバリアフリー化に加え、駅西口側に広がる「石岡ステーションパーク¹」と駅を一体化させたことで、駅利用者の利便性を向上させました。

さらに、今年の「石岡のおまつり」初日にあたる9月15日には、ステーションパークの1階部分に飲食エリア「かんぱん横丁」がオープンします。今年5月に募集を開始し、パン、パスタ、タコス、焼き鳥の4店舗の出店が決まりました。これから、駅周辺が通勤や通学で駅を利用する方の“気軽に利用で

1. 1階がバスターミナルおよび駐車場・駐輪場、2階がオープンスペースや憩いの場などで構成された施設。

きる安らぎの場”へと成長し、さらなる交流の活性化と賑わいの創出につながることを期待しています。

■「石岡のおまつり」を本市から世界へ

本市の観光を代表する「石岡のおまつり」は、正式名称を「常陸國總社宮例大祭ひたちのくにそうしやぐうれいたいさい」といい、創建千年を誇る古社・常陸國總社宮の最も重要なお祭りです。お盆や正月には帰省せずとも、このお祭りには帰省するといわれるほど、市民にとっては思い入れのあるお祭りで、本市が1年間でもっとも熱くなる日です。

お祭りは毎年9月の敬老の日を最終日とする3連休に行われ、昨年は約44万人の見物客で賑わいました。40台を超す山車や幌獅子ほろじしの競演は、大変見応えがあり、遠方からのお客さまも年々増えています。今年は、60万人の見物客の誘客を目指しており、休憩所やトイレ、食事などの環境整備に加え、安全管理の強化を図りたいと考えています。

「石岡のおまつり」は、「関東三大祭」に数えられるほど有名です。しかし、お祭りで奉納される「土橋町の獅子頭」が茨城県の有形民俗文化財として、また「富田のささら」、「石岡ばやし」が無形民俗文化財として指定を受けているものの、「石岡のおまつり」全体での文化財指定には至っていません。まずは、本市の無形文化財登録に向けて取り組みを進め、将来的には県の無形民俗文化財、国の無形民俗文化財、そして、ユネスコ無形文化遺産への登録を目指します。

■関東で最も長い歴史を持つ図書館

石岡市立中央図書館は、図書館によって広く知識を世界に求め、子どもたちを育成し、文化を基盤とした地域社会の建設を目的として、明治22年に創立されました。その歴史の長さは関東一で、来年130周年を迎えます。明治30年に創立した国立国会図書館よりも長い歴史がありますが、何よりもその時代に図書館を創立したという精神が、素晴らしいと思います。

また、平成29年4月、幼児期から本に親しみ、家族や友だちとの絆を深め、ふるさとを愛する心を育む場所を目指して「こども図書館本の森」をオープンしました。子ども専用の独立した図書館

は県内初の取り組みで、館内は本棚やテーブルに木を使用するなどの温もりのあるつくりとし、靴を脱いでリラックスして過ごせるじゅうたん敷きの「おはなしの部屋」も用意しました。この部屋では、自由に絵本と親しめ、会話もできるほか、読み聞かせボランティアの方々が毎月おはなし会を開催しています。

蔵書は約3万冊で、児童書をはじめ保護者向けの育児書も取り揃え、郷土資料コーナーも設けました。また、窓際には備え付けの学習机を設置し、館内で「調べ学習」ができるタブレットの貸し出しを行うなど、子どもたちの学ぶ意欲を育む環境づくりにも取り組んでいます。



こども図書館本の森の「おはなしの部屋」

■多機能型図書館を目指して

平成31年1月4日、防災拠点機能を備えた新庁舎が開庁する予定です。また、これに合わせ、効率的な行政運営を行うために議会機能を八郷庁舎から新庁舎に移転します。新庁舎へ移転後の議場を有効活用するために2度実施した市民ニーズ調査では、いずれも図書館を求める声が寄せられ、中央図書館の分館を開設することにしました。

今後の未来図としては、本館と分館の役割分担を明確にし、従来の本を貸し出すという基本的な機能だけでなく、双方を連携させた「多機能型」の図書館にしたいと考えています。具体的には、図書館サービスをネットワーク化させ、双方の図書館を横断的に検索・貸出・返却ができるなどの機能を備えます。また、高齢化が進んでいることを受け、各地域の公民館にも図書館の貸出・返却ができる機能を持たせ、さらに、自宅まで図書館を配達するサービスも付加したいと考えています。

■ふるさと学習で郷土愛を醸成

本市には、豊かな自然や歴史など、地域の素材を利用した教育を推進できる環境があります。そこで、郷土愛の醸成と未来を担う人材育成を目的に、小中学生を対象とした「ふるさと学習」を始めました。

「ふるさと学習」のテキストは、平成26年度から2年間を費やし、本市の歴史や文化などについて、市民の方々と学校の先生が協力して作成しました。

現在、総合的な学習の時間などを利用して、小学校1年生から中学校3年生までの9年間にわたり、ふるさと石岡について学んでいます。具体的



「ふるさと学習」の
テキスト

には、小学校の低学年は年間4時間、高学年は年間5時間を使用し、本市の魅力を様々な方法で表現する授業を行っています。また、中学校では年間5時間を使用し、本市の現状と課題を知ったうえで将来のまちの姿を提案する授業を行っています。

本市の公民館は、石岡地区に4つ、八郷地区に8つあり、各館に「みらい大学」を作る予定です。近々、八郷地区の小幡では「小幡みらい大学」を開校します。そこでは、お年寄りが子どもたちにその地域の民話や歴史、お手玉、あやとり、竹馬などを伝承します。

そして、年に一度、市民会館で「ふるさと学習サミット」を開催し、「みらい大学」ごとに一年間の集大成を発表します。サミットでの発表を目標にすることで、全員がそこに向かって知恵を出し合い行動します。成果を共有するとともに、いい意味で競い合う形になるため、お年寄りたちの目の色も変わることでしょう。

また、「ふるさと学習」は、学んで終わりではなく、毎年記録誌を作成して残していきます。50年経てば、その記録誌は未来にふるさとを伝える一冊となるため、大変有意義な活動になると思います。

これまで公民館は、社会教育の場というわかりにくい役割のものでした。しかし、子どもたちの学習の場、地域福祉という機能に加え、図書館機能が備われば幾重もの機能を持つ重要な場所になります。

■安全・安心・快適な交通環境づくり

平成24年、本市と土浦・つくば方面を結ぶ「朝日トンネル」が開通し、アクセスが格段に向上しました。これに続き、桜川市真壁町へ抜ける「上曽トンネル」の整備を進めています。上曽峠を越える県道石岡筑西線は幅員が狭く、冬場は凍結や降雪で度々交通不能となることがありましたが、トンネルが開通すれば、安全性や利便性が向上するだけでなく、県西地域からの交流人口増加も望むことができます。

しかし、利便性の追求により、資源の宝庫である八郷地区の魅力が平準化され、さらには失われてしまう恐れがあります。八郷地区の茅葺民家や柿岡の獅子などの価値のあるものはきちんと見極め、後世に残していかななくてはなりません。残してこそ、価値が高くなるものもあります。

また、現在、本市は自転車を活用したまちづくり「りんりんタウン構想」にも取り組んでいます。これはサイクルツーリズムによる観光振興だけでなく、普段のライフスタイルにも自転車を取り入れることで、ハード・ソフト両面からサイクリング環境の構築を目指す県内初の取り組みです。

日頃、私たちはわずか100mの移動でさえ自動車を利用するなど自動車に依存する生活を送っています。しかし、人口減少の進むこれからの時代に対応したまちづくりとして、過度な自動車依存体質から脱却しなければなりません。既に、滋賀県の守山市が実現していますが、本市も同様に健康増進や環境への負荷低減など自転車利用のメリットを活かした取り組みを進めるとともに、本市全体の公共交通ネットワークの再構築に努めてまいります。

■筑波銀行に期待すること

筑波銀行には、これからも庶民の銀行であってほしいと思います。本市は中小企業よりも零細企業が多いまちです。筑波銀行は、痒いところに手が届く、地方を応援する金融機関として地域に貢献してほしいと思います。

取材日：平成30年7月19日

写真提供：石岡市